〔論　文〕

『植民地時代の朝鮮映画』をどう見ればよいのか

Aspects of the Problems on Korean movies in the colonial days

下　川　正　晴
Shimokawa Masaharu

１、はじめに

2007年12月から2008年11月にかけ、筆者は大分・別府地区で韓国映像資料院（ソウル）制作のＤＶＤ「発掘された過去」の上映活動を行ってきた。2008年12月までに通算４回にわたる上映会を行い、うち１回の学術シンポジウムを主催した。2009年度には福岡地区で、同上映会・シンポジウムを行うべく準備中だ。本稿では、これまでの経緯を振り返るとともに、上映会・シンポジウムの中で浮上した諸点について整理する。

・第１回シネテックコリア「ＤＶＤ『発掘された過去』上映会」（2007年12月８日、大分市iichiko総合文化センター地下１階映像小ホール）
・第２回シネテックコリア「ＤＶＤ『発掘された過去』上映会」（2008年５月22日から毎週水曜日に計４回、ＪＲ別府駅前通り「中村珈琲店」）
・第１回「日韓次世代交流映画祭／植民地時代の映画『発掘された過去』上映会＆学術シンポジウム・『発掘された過去・第２集』上映会」（2008年11月16日、別府市ビーコンプラザ国際会議室、参加者約200人）
・第３回シネテックコリア「幻の朝鮮映画上映会」（2008年12月13日、大分県立芸術文化短期大学大講義室）

２、上映会開催に至る経緯

筆者は2007年４月、本学情報コミュニケーション学科の教授（メディア、韓国論）として着任した。当時は、ソウルの国民大学校国際大学院で授業をするため、２週間に１度、渡韓する日々を送っていた。東西大学校（釜山）に2008年春から、林権澤映画芸術学部が開設されることになったのを知ったのは、同年夏のことだ。かねてからの知己であるチャン・ジェクク同大副総長から直接聞いたのである。林権澤（イム・グォンテク）氏は名作「風の丘を越えて～西便制」（1993年）などで知られる韓国映画界の巨匠である。同年10月初旬、釜山国際映画祭で釜山を訪れた祭、同大学を訪問した。同大学は日本研究、ＩＴ、映像制作では韓国でトップ水準の大学である。情報コミュニケーション論を研究・学習する本学科と同大学が提携関係を結び、林権澤監督の作品上映を中心とする「イム・グォンテク映画週間」（仮称）を大分県で開催する計画が持ち上がったのは、今にして思えば、自然な流れだったかもしれない。

「イム・グォンテク映像週間」の下調べのため筆者は10月中旬、ソウル麻浦区にある韓

国映像資料院を訪ねた。そしてイム監督が製作した100本の映画のうち、半数以上の作品がビデオ、ＤＶＤ化されて所蔵されていることを確認した。さらに研究員の情報提供により、同資料院が数日前にＤＶＤ「発掘された過去」を市販したばかりであることを知ったのである。このＤＶＤは後述するように、半世紀以上の空白を経て北京で発見された植民地時代の朝鮮映画７本のうち４本を収録したものだ。

「半島の春」（1941年、イ・ビョンイル監督、84分）
「家なき天使」（1941年、チェ・インギュ監督、73分）
「志願兵」（1941年、アン・ソギョン監督、56分）
「朝鮮海峡」（1943年、パク・キチェ監督、75分）

の４本である。筆者は資料院側からこのＤＶＤの提供を受け、帰国後さっそく鑑賞した。そして、植民地時代の生々しい映像の記録に驚いた。朝鮮総督府の検閲のもとで作られた映画が、はからずも「時代の肖像（プロフィール）」を映し出す貴重な記録になっていることに、驚嘆したのである。「これは日本人も見るべき映画だ。日本で上映会をやるべきだ」と思った。

韓国映像資料院がＤＶＤに添付したり、韓国内での上映会に際して配布したりした資料によると、まず2004年11月、中国電影資料館（北京）を訪問した韓国映像資料院関係者により、同館に「軍用列車」（1938）「漁火」（1939）「家なき天使」（1941）「志願兵」（1941）の４本が所蔵されていることを確認された。同年12月には、この４本のフィルムの引渡しが行われた。翌年11月には、さらに「迷夢」（1936）「半島の春」（1941）「朝鮮海峡」（1943）の３本が同館に所蔵されていることが確認された。これら７本の映画を韓国映像資料は「ＤＶＤ『発掘された過去』」（2007年、「半島の春」「家なき天使」「志願兵」「朝鮮海峡」）、「ＤＶＤ『発掘された過去・第２集』（2008年、「迷夢」「軍用列車」「漁火」）として復刻編集し、順次刊行していったのである

２週間後、授業のためソウルを訪れた筆者は、放課後すぐに資料院を再訪した。そして、日本での上映会の共同開催を提案した。その時、再び幸運に恵まれた。このＤＶＤで解説を担当されていた映画評論家のキム・ジョンウォン氏（東国大学校映像大学院兼任教授）が、たまたま来院されていたのである。キム氏が上映会のために来日され、解説に当たられるよう説得した。キム氏はこれを快諾された。そして、大分県立芸術文化短期大学と同資料院の「共催」に関する手続きを経て、ＤＶＤ「発掘された過去」上映会を大分市で実施することが、11月中旬には正式に決まったのである。スピーディーな展開だった。

大分県立芸術文化短大の利光功学長（当時）は、第１回シネテックコリア「ＤＶＤ『発掘された過去』上映会」の際に配布した８ページの資料で、次のように述べている。「映画フィルムが散逸していたため“空白期”だった植民地時代の映像発掘は、各方面から大きな注目を浴びており、広くご観覧いただく機会を設けることは、芸術文化一般について教育・研究を推進している本学の使命だと考えます」。これは連続上映会の開催を重ねてきた筆者の気持ちそのものである、と言ってよい。

３、植民地末期の朝鮮映画と「歴史観」

「日本の韓国支配は韓国人としては恥かしい歴史的事実であるが、特に日帝末期の韓国

映画については“失われた過去”と言っても間違いではなかった。少なくとも今回紹介される『半島の春』『家なき天使』『志願兵』（以上1941年）『朝鮮海峡』（1943年）などの親日映画が発掘されるまでは、そうだったのである」

第１回シネテテックコリアの解説者として来日したキム・ジョンウォン氏は、このように語り始めた。「1905年の乙巳保護條約（第２次日韓協約）の締結、1910年の「韓国併合」によって朝鮮の主権が失われた。1937年に始まった日中戦争を奇貨として強圧政策を本格化させた朝鮮総督府は、特別志願令（1938年）と国民徴用令（1939年）を公布し、日本支配下の朝鮮人は戦場に赴くことを余儀なくされた」

「それだけではない」と、キム氏は強調する。「総督府は朝鮮語教育の撤廃とともに、日本語を使用するように圧力を加える一方、創氏制度によって朝鮮人の姓名を日本式に改名するようにした」のであるという。

キム氏の指摘の引用を続けよう。

「この時期に朝鮮を統治したのは、第７代総督の南次郎をはじめとする３人の総督だ。朝鮮軍司令官を務めた陸軍大将・南次郎は朝鮮総督として赴任すると、社会統制を強化し、1937年には朝鮮人が皇国臣民であることを誓う『誓詞』を制定し、さらに天皇の写真を各学校に配付して拝謁させた。思想犯に対する予備拘束令を公布（1941）し、親日団体を組織して日本に友好的な世論を作る一方、戦争遂行に邁進するよう志願兵制度を実施した。このような朝鮮統治の基調は、南次郎以後の総督にも継承された」

「“内鮮一体”は日中戦争から太平洋戦争に至る時期において、朝鮮支配のための統治の手段だった。徴兵制は“半島人”を皇国臣民に作り上げ、民族の差別をなくすという名分によって本質が糊塗された。したがって今回上映される映画４本は、日帝末期に朝鮮が体験しなければならなかった植民地の歴史の産物だと言うことができる。この時代の朝鮮映画が、親日問題から決して自由になれない理由でもある」

キム氏によれば、植民地末期の軍国主義称揚映画は、大きく言って、３種類の形態に分類できるという。

１つ目は、日本の優越性を土台に、朝鮮社会の窮乏と矛盾の打破を強調し、協同精神によって所得の増進を促すという、啓蒙の方式である。２つ目は“内鮮一体”を標榜して親日思想を注入し、戦時動員体制のもとで国民の義務を説くという部類だ。３つ目は軍国主義を擁護し、徴用と志願入隊によって「聖戦」を遂行することで、国の恩に報いねばならないという論理を用いて、総督府の皇国臣民化政策を積極的に擁護したケースである。

このようなキム氏の指摘は、現在の韓国で通用している植民地時代をめぐる韓国人の歴史観そのものである、と言って差し支えないだろう。このような歴史観も今回発掘された映画７本を鑑賞し検討する中で、改めて、その真価が問われてくると思われるが、それはいったん、これからの課題としておきたい。

４、「ＤＶＤ『発掘された過去』」収録作品の解説

キム・ジョンウォン氏が上映会のために寄せた解説資料を抄訳して紹介する。

●「半島の春」（1941年、李炳逸（イビョンイル）監督）

製作／明宝映画社　原作／金聖珉（キムソンミン）　脚色／咸慶鎬（カンギョンホ）　撮影／梁世雄（ヤンセウン）　出演／金一海（キムイルヘ）、金素（キムソ）

英（ヨン）、徐月影（ソウォルヨン）、白蘭（ペクラン）、金漢（キムハン）、李錦龍（イクムヨン）

1940年代、日帝の支配下で朝鮮映画人が体験した困難な環境と、これを克服しようとする人々の意志と愛を描いた通俗劇である。

李英一（金一海）は、レコード会社に勤務する新鋭作家だ。友人の映画監督許壎（徐月影）は映画社の仲間たちと同居しながら、トーキー映画「春香伝」の制作を進めている。しかし、家賃はもちろん生活費も捻出できず、映画製作も順調でない。映画のスポンサーであるレコード会社文芸部長の韓啓洙（金漢）は、その境遇を救うべく手助けするどころか、主演の新人俳優・貞喜（金素英）にもの欲しげな視線を送るだけだ。中断した撮影を続けさせようと、英一は作曲家に支払うべき金を映画制作費に充当する。英一は公金横領の嫌疑で警察署に連行された。しかし、彼に片思いを寄せる安羅（白蘭）の助力で釈放され、看護を受ける。実業家・朴昌植（李錦龍）が100万ウォンを投じて映画社を吸収し、映画制作の財政問題は解決する。「春香伝」は完成し、英一は許監督らの見送りを受けながら、貞喜とともに映画研修のため日本へ向かう。

この映画には「春香伝」の撮影現場と演技シーンが劇中劇の形で登場し、当時の撮影器材や設備を垣間見ることができる。主人公の英一が公金横領の容疑で拘束される危機に瀕すると、カメラは空中に急迫する雲の群れを捕らえ、不安な心理を表現する。降りしきる雨を窓からながめる貞喜、雨脚の中を歩く英一。愛の心象を対比させる典型的な通俗劇の技法も視線を引く。「半島の春」にも例外なく、「親日」を強調する主題が現れる。映画社を設立した朴昌植は、「内鮮一体」の原則と皇国臣民の責任を演説する。この３分を越えるシーンで彼は、今日は重大時局であり、一致協力して、国民文化の進展に貢献する映画制作に邁進する、と述べる。

1910年に咸鏡南道咸興で生まれた李炳逸監督は、東京・神田にある英語専門学校を卒業した後、日活撮影所で７年間の映画修業をして韓国に戻り、「半島の春」を監督した。映画の原作は1940年度「週刊朝日」の懸賞募集小説の当選作である「半島の芸術家」である。解放後、李監督はアジア映画祭特別喜劇賞を受賞した「嫁入りする日」や「自由結婚」などを演出し、1978年に68歳で亡くなった。

●「家なき天使」（1941年、崔寅奎（チェインギュ）監督）

製作／高麗映画南大門撮影所　原作・脚色／西亀元貞　台詞／林和（イムファ）　撮影／金井成一
出演／金一海（キムイルヘ）、文芸峰（ムンイェボン）、金信哉（キムシンジェ）、秦薫（シンフン）、李相夏（イサンハ）、尹逢春（ユンボンチュン）

子供たちを前面に打ち出し、その不遇な環境と彼らを助ける人々を中心に描いたという点で、同監督の前作「授業料」（1940年）と同系列に属する映画だ。「家なき天使」は啓蒙的な写実主義映画と見るのが妥当である。全般的にそのような基調に充ちており、この主題だけをみれば「親日」とは無関係なように見える。

孤児の明子（金信哉）と龍吉（李相夏）姉弟は、親方にいじめられて家出し離れ離れになる。救済事業家の方聖貧（金一海）に龍吉は助けられ、明子は聖貧の妻の兄である医師・安仁圭（秦薫）の医院で看護士になる。龍吉は孤児院「香隣園」から脱出しようとした友達２人を止めようとして、水に落ち危篤状態に陥る。龍吉は安医師の応急処置で危機を脱し、姉とも感動的に再会。孤児らは日章旗の下で「皇国臣民の誓詞」を誇らしげに朗

読する。

この映画は、冒頭で「この一編を浮浪児教化の実践者・方洙源氏と香隣園の少年たちに贈る」と明らかにしている。一人の社会奉仕者の献身的な姿を借りて、朝鮮の子供たちが体験する悲惨な現実を浮き彫りにする意図がある。しかしストーリーが展開すると、このような主題の性格は、日本の植民地政策に追従するセリフと画面によって変質して行く。

それは映画の導入部で方院長が龍吉に息子を紹介しながら、「将来は志願兵としてラッパ手になるんだ」と話す時に、すでに予告された要素でもあった。写実主義が時代の社会現象や人間の意識を表出するという特徴を持っているとするなら、「家なき天使」は「親日」の有無を離れて、1940年代に朝鮮が直面した現実を描写したものと見ることもできる。

崔寅奎監督は1911年、平安北道に生まれた。10歳代後半で日本に渡り、京都撮影所への入社を目指したが、失敗して帰国。録音技術にすぐれ、1939年に「国境」という活劇で映画界にデビューし、翌年の作品「授業料」で注目を浴びた。３作目が「家なき天使」である。以後、「太陽の子供たち」（1944年）「愛の盟誓」（1945年）などの親日映画を監督した。解放後は、日帝下で独立運動をする愛国志士の映画「自由万歳」（1946年）などを演出した。1950年に朝鮮戦争が起きると、北朝鮮に拉致された。

●「志願兵」（1941年、安夕影（アンソギョン）監督）

製作／東亜映画製作所　原作／朴英熙（パクヨンヒ）　脚色／安夕影（アンソギョン）　撮影／李明雨（イミョンウ）　出演／崔雲峰（チュウンボン）、李錦龍（イクムヨン）、文芸峰（ムンイェボン）、金一海（キムイルヘ）、金福鎮（キムボクチン）、林雲鶴（イムウナク）

日本の軍国主義を擁護し、朝鮮青年に尽忠報国を説く親日映画だ。親日に消極的な「半島の春」「家なき天使」に比べ、積極的な様相を見せる。

父と死別後、中学を中退し家業に従事してきた勤勉な青年・林春浩（崔雲峰）は、ソウルの地主から、父が行っていた小作管理を他の人物に任せるという通告を受け、生計を心配する境遇になる。春浩は友人の昌植（李錦龍）が許婚者の芬玉（文芸峰）と一緒にいるところを見て誤解し、芬玉も春浩が地主の妹と仲良く歩いている姿を見て苦悶する。春浩は日中戦争を契機に、人知れず悩む。日本人と同じ「皇国臣民」なのに、朝鮮人には兵役義務がないからだ。しかし、朝鮮でも志願兵制度が実施されるという新聞記事を読み、急きょソウルに上京し志願兵に応募する。この事実を知った地主の朴昌起（金一海）は、これまでの冷遇とは一変し家族の暮らしを守ることを約束する。昌植は自動車運転を学んで上京し、春浩は出征の日、芬玉の見送りを受けて軍用列車に上る。

このように、「志願兵」は志願兵制度の正当性を宣伝し、皇国臣民の役割と義務を実現させることに制作意図がある。主人公の春浩は、家長としての存在より尽忠報国を重視する青年として描かれる。この映画の性格は、冒頭に浮び上がる字幕で明らかになる。「光輝ある皇紀2600年を迎え、我ら半島映画人はこの一篇の映画を南総督に捧ぐ」。映画が含蓄するテーマである。「志願兵」は映画の冒頭シーンから日章旗の人波で始まり、出征の歌が鳴り響く中で人々が雲集する日章旗の波で終わる。安夕影は日帝植民地時代に「独立の歌」を作り、祖国独立後は、タイトルを変えて今も韓国と北朝鮮で歌われる「われわれの願いは統一」の作詞者である。その人物がこの作品を演出した監督と同人物であるとは

思えないだろう。

安夕影はジャーナリストであり、画家であり、シナリオ作家でもある多才多能の芸術家だった。1901年にソウルで生まれた。東京美術学校を中退し、母校の徽文高普（ソウル）の美術講師当時に、東亜日報の連載小説の挿絵（1921年）を担当。これが契機になり、韓国挿絵界の先駆者になった。初めてメガホンを握ったのは1937年、盲目の父の目が開くようにする孝女の物語「沈清」だった。解放後は、大韓映画協会理事長などを歴任し、1950年に50歳で死去した。

●「朝鮮海峡」（1943年、朴基采（パクキチェ）監督）

製作／朝鮮映画株式会社　脚本／佃順　撮影／頼戸明　編集／梁柱南（ヤンジュナム）　出演／金一海（キムイルヘ）、南永民（ナムヨンミン）、独銀麒（ドクウンキ）、文芸峰（ムンイェボン）、金信哉（キムシンジェ）、崔雲峰（チェウンボン）

家父長中心の儒教的因習社会の価値観を土台に、いわゆる「内鮮一体」の精神を追究した作品だ。李一族の長男が戦死すると、今度は次男が軍隊に志願し、国に奉仕するという内容だ。官制の朝鮮映画株式会社が徴兵制を記念して初めて作った映画である。1941年に東条英機内閣が発足すると、朝鮮総督府は国内の映画社を全部解体し、戦時体制にするため単一会社への統合を指示した。これに伴い1942年９月23日に設立されたのが、朝鮮映画株式会社である。

頑固な父親（金一海）の反対で、肉親の縁を切ってまで錦淑（文芸峰）と結婚した成基（南永民）は、妻が姙娠したことも知らないまま軍に志願し戦線へ向かう。一人で生活して行かねばならない錦淑は、工場で縫製仕事をして子供を産み育てる。慰めは成基の妹の清子（金信哉）が自身の境遇を理解してくれている点だ。しかし成基は戦線で負傷し、無理な労動がたたった錦淑は病院に入院する。息子が軍隊に志願し錦淑が出産したことで、気持ちが和らいだ父母が、彼女を訪ねて来る。夫からも電話がかかってくる。武勲をたてて、と夫に願う錦淑。しかし苦労の甲斐もなく、息をひきとる。映画のラストシーンは、成基が療養所で看護員の助けを借り海岸を散策する情景だ。水平線の彼方に広がる空をながめ、「美しい」とつぶやく。

「朝鮮海峡」は「半島の春」「家なき天使」「志願兵」の場合とは異なり、最初から最後まで日本語の台詞になっている。登場人物の名前も韓国式でなく、セイキ（成基）、キンシュク（錦淑）、キヨコ（清子）などと、日本式の発音で呼ばれる。韓国人にとっては、母国語をなくした憂鬱な時代の自画像である。

朴基采監督は1906年、全羅南道光州に生まれた。同志社大学に通い、東亜キネマで演出の修業を積んだ。デビュー作は「青春悲歌」。帰国後、安夕影脚本の「春風」（1935年）で国内活動を始め、李光洙原作の映画「無情」（1939年）を発表する。「朝鮮海峡」に先立つ1942年には、軍国主義の御用映画「私は行く」を作った。解放後は、キャバレーを舞台に暗躍する密輸団の不法行為を描いた「夜の太陽」（1948年）を演出。1950年、朝鮮戦争で北朝鮮に拉致された。

５、データ＜植民地末期の朝鮮映画人＞

ＤＶＤ「発掘された過去」に添付された小冊子から、日本植民地時代の末期に活躍した

朝鮮映画人のプロフィールを紹介しておく。このようなデータは、現在の日本ではきわめて貴重なものだ。(韓国の五十音順)

姜弘植（カン・ホンシク、1907～1971）
別名は秦薫。歌手、映画俳優、映画監督。平壌で生まれ、日本で俳優活動。1926年ごろ帰国し「山寨王」(1926)「長恨夢」(1926)「夜明けのとき」(1927) などに出演。演劇「アリラン峠」(1930) などに出演。越北後「私の故郷」(1949) などを監督。

金聖春（キム・ソンチュン、1903～1977）
照明技師、映画制作者。ソウル生まれ。1920年、京都の東亜キネマ照明部に入社。不二映画社などで照明担当。1934年帰国後、「散水車」(1935)「無情」(1939) などで照明。1942年、朝鮮映画製作株式会社で「朝鮮海峡」(1943)「望楼の決死隊」(1943) など照明。

金信哉（キム・ジンジェ1919～1999）
映画俳優。安東出身。夫の崔寅奎に薦められ演技を始め、「沈清」(1937) に初出演。「授業料」(1940) (1943)「望楼の決死隊」(1943) などに出演。

金一海（キム・イルヘ、1906～2004）
映画俳優。日本で俳優として活躍し1934年ごろ帰国。「散水車」(1935)「春風」(1935)「無情」(1939) のほか、日帝末期の軍国主義映画などに出演。

金駿泳（キム・ジュンヨン、1907～1961）
作曲家。黄海道出身。東京の東洋音楽学校に学び、1930年代から40年初め朝鮮中央放送局楽団で、伴奏音楽の編曲と作曲で活躍。大衆歌謡「焼栗打令」「処女総角」「愛に騙され金に泣く」などを作曲。「志願兵」(1941) で音楽担当。

金学成（キム・ハクソン、1912～1982）
専修大学で学び1935年帰国。京城撮影所に入社。1939年日本撮影技術協会の試験を受け、正会員に登録。「城隍堂」(1939年) で撮影技師生活を始め、高麗映画協会撮影部や (社) 朝鮮映画製作株式会社の所属で「家なき天使」(1941) などを撮影。

文芸峰（ムン・ィエボン、1917～1999）
咸鏡南道咸興の出身。(1932)「迷夢」(1936)「ナグネ」(1937)「君と僕」(1941) などに出演。1948年越北し、以後、北朝鮮で生活。

朴基采（ボク・キチェ、1906～？）
映画監督。全羅南道光州の出身。同志社大学で学び、東京の東亜キネマに入社。「春風」(1935) でデビュー。1937年朝鮮映画株式会社の設立作品「無情」(1937) を演出。社団法人・朝鮮映画製作株式会社に入社。「私は行く」(1942)「朝鮮海峡」(1943) など演出。

卜恵淑（ボク・ヘスク、1904～1982）
俳優・声優。1921から25年まで、新国座で活動。その後、「春香伝」「カチューシャ」公演。20年代後半から映画に出演し、日帝末期に活発に活動。映画「授業料」(1940)「若い姿」(1943) などに出演。

安夕影（アン・ソギョン）

本名は安碩柱（アン・ソクジュ）。小説家、挿絵画家、シナリオ作家、映画監督。ソウル生まれ。「夜明けのとき」（1927）の美術監督、主演でデビュー。1930年、朝鮮シナリオライター協会を設立。「沈清」（1937）「志願兵」（1941）脚本・監督。

梁世雄（ヤン・セウン、1906～？）

撮影技師。釜山生まれ。1924年京都の東亜アカデミー撮影部に入社。1935年帰国。「春風」（1935）「漢江」（1938）「軍用列車」（1938）など撮影。1942年（社）朝鮮映画株式会社に入社。「我等の戦争」（1945）など撮影。朝鮮戦争時、北朝鮮に拉致される。

尹逢春（ユン・ボンチュン、1902～1975）

俳優、映画監督。咸鏡南道の出身。1927年羅雲圭がいた朝鮮キネマプロダクションに入社。映画数本に出演。1930年「盗賊」で監督デビュー。「大きな墓」（1931）などを演出。「漢江」（1938）「家なき天使」（1941）などに出演。解放後は「尹奉吉義士」（1947）「柳寛順」（1948）などを演出。

李錦龍（イ・クムリョン、1906～1955）

俳優、映画監督。1926年朝鮮キネマプロダクションに入社。羅雲奎の作品「風雲児」（1926）などに出演。1930年代後半から40年代まで活発に活動し、「漢江」（1938）「迷夢」（1936）「若き姿」（1943）などに出演。

李明雨（イ・ミョンウ、1903～？）

別名が李銘牛。撮影技師、映画監督。ソウル生まれ。朝鮮人最初の撮影技師。録音技師の李弼雨の弟。朝鮮キネマプロダクションに入社。「運命」（1927）でデビュー。「アリランその後」（1930）「海よ語れ」（1935）など撮影。トーキー映画「春香伝」で監督デビュー。1940年代（社）朝鮮映画株式会社の技術スタッフとして活動。

李炳逸（イ・ピョンイル、1910～1978）

監督。咸鏡南道咸興の出身。1936年日活映画社演出部に入社。1940年に帰国し、明宝映画社を設立。1947年渡米。南カルフォルニア州立大学（ＵＳＣ）映画学科に入学。「嫁ぐ日」（1956）「自由結婚」（1958）などを演出。

李弼雨（イ・ピルウ、1897～1978）

撮影技師、録音技師、映画監督。ソウル生まれ。日本で撮影と現像を学び、大阪の鈴木商会撮影所などで勤務。トーキー技術研修のため日本へ。1933年帰国後、京城撮影所に入社。朝鮮初のトーキー映画「春香伝」（1935）の撮影、録音。

李創用（イ・チャンヨン、1906～1961）

映画制作者、配給業者、撮影技師。咸鏡北道会寧の生まれ。朝鮮キネマプロダクション技術部に入社。羅雲奎プロダクションを作り、「愛を尋ねて」（1928）などを撮影。1931年日本の新興キネマ技術部に入社。1933年ごろ帰国し、映画配給と制作に従事。1937年配給所・製作社の高麗映画協会を設立。以後「授業料」（1940）などを制作。1942年（社）朝鮮映画製作株式会社に入社し「望楼の決死隊」（今井正監督、原節子出演、1943）制作。

崔寅奎（チェ・インギュ、1911～？）

監督。平安北道延辺出身。「心清」（1939）で李弼雨の助手。「国境」（1939）で監督デビュー。高麗映画協会に入社。「授業料」（1940）を共同演出。「家なき天使」（1941）演

出。「太陽の子供たち」（1944）「愛の誓い」（1945）演出。解放後、高麗映画社を設立。「自由万歳」（1946）「罪なき罪人」（1948）「独立前夜」（1948）などを演出。朝鮮戦争中に北朝鮮に拉致。

６、おわりに

「韓流」ブームの高揚とは対照的に、日本における韓国映画史の学術的研究は低迷してきた、というしかない。入手しやすい通史本としては「林権澤とその時代」との副題がついた佐藤忠男「韓国映画の精神」（岩波書店、2000年）がある。資料的にもよくまとまっており、韓国映画に関する愛情が感じられる好著だ。

岩本憲児編「映画と『大東亜共栄圏』」（森話社、2004年）には、金京淑の論文「日本植民地支配末期の朝鮮と映画政策～『家なき天使』を中心に」が収録されている。この時期の映画について研究した先駆的な論考だが、惜しむらくは「映画発掘前」の論文であり、実際に、映画を見ていないという致命的な弱点がある。

内海愛子・村井吉敬「シネアスト許泳の『昭和』」（凱風社、1987年）は、映画「君と僕」（1941）を監督した日夏英太郎（許泳の日本名）の波乱に満ちた人生を活写した作品である。約20年前に書かれた著作だが、丹念な取材によって、当時の事情を生き生きと伝えてくれる。

1941年７月17日、内務省による最初の検閲に合格した『家なき天使』は、いったんは文部省推薦映画となった。「映画旬報」（41･9･21）には「文部省推薦　第１回半島映画」との広告が載っている。しかし、公開間際に内務省のクレームで一部がカットされた。改定版（日本語吹き替え）に文部省の推薦はつかなかった。

桜本富雄「大東亜戦争と日本映画」（青木書店、1993年）は、内務省のクレーム理由を①登場人物たちが朝鮮語を話す②服装が朝鮮服である③浮浪児を収容する施設がキリスト教精神で運営されているーーとしている。結局「家なき天使」は、東京では国際劇場で３日間、他の映画館５館では５日間上映されたが、観客は少なく、その６割が朝鮮人だったという。（金京淑論文「日本植民地支配末期の映画政策」などから要約）

一方、1942年４月「釜山日報」に載った映画広告には「朝鮮語全声・国語版」とあり、日本語字幕付きの朝鮮語トーキー映画であることが明示されていた。日本の植民地支配と言語政策についてはかねてから論争の的になってきたが、1941年～43年制作の韓国映画が見つかったことで、これらの論争も事実に基づいた形で展開されうる素地ができたと評価していいだろう。

田中文人制作・監督「２つの名前を持つ　キャメラマン金学成・金井成一の足跡」（2005、81分）というドキュメンタリー映画がある。「家なき天使」で撮影を担当した人物の解放前・解放後が主題である。2005年山形国際ドキュメンタリー映画際で上映された。できれば再映したいものである。

＊　　＊

「植民地時代の朝鮮映画」研究は、まだ始まったばかりである。しかし、当時のフィルムがＤＶＤとしてリリースされたことで、多くの研究者が当時の映像を簡単に見れるようになった。その時代と映像に関する関心は急速に高まっている、と言っていい。

筆者が2008年12月、大分市で「ＤＶＤ『発掘された過去』上映会」を日本で初めて行った時に予感はあった。その後、全国各地の朝鮮史研究者や映画研究者の関心を呼び醒ましているのは好ましい現象だ。2009年11月の「日韓次世代交流映画祭」の時には、わざわざ東京からやってきた人たちもいたほどだ。2009年度に計画している「上映会＆シンポジウム」では、これまでの積み重ねを生かして、より内容の充実したものにしたい。